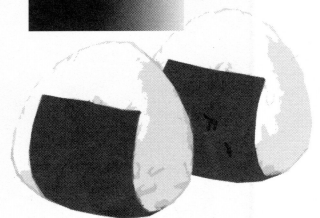


常盤平団地

山田まゐ子



人が倒れたときは夜でもわかる。白い団地の壁に、紅い影が映っている。音はないが、遠目にも救急車の灯りだと知る。すれ違う老人たちはそっとみないふりをして通り過ぎる。誰も明日のわが身とは思いたくない。

現在わたしの住む大阪の団地は総戸数二千二百戸、昭和三十年代に建てられた洗濯機置き場のない六畳一間で、エアコンを持たず窓を開け放して寝ている老人も多い。真夏日の昼には窓どころかドアも開け放して、玄関で少しは冷たいであろう板の間に、犬や猫と寄り添って眠るものもある。夜には救急車の紅いランプが団地の壁にゆらめき、窓ガラスを打ち破る消防車のレスキュー隊も珍しくない。窓の鍵は外して寝るしかない。下手に助かった場合に困るからだ。決して倒れて早急に救急車に乗りたくないという高次元な願いではなくて、レスキュー隊が窓を打ち破った場合、高額なガラス破損費用が発生するからだ。ベランダガラスのギザギザに割れた様子を下から見上げた日、わたし

はいくらだろうかと考え込み、恐怖から一度も鍵をかけていない。

日本の団地の春は美しい。どのような老朽化団地であろうと窓越しに桜の花びらが舞う。うちの窓からも、雀どもが飛んできて、桜の花びらを散らしているのがみえる。雀は目白や鴨ひよどりと違って、嘴くちばしが短いので、蜜を吸うときに不器用にも花のもとから食い散らかすしかない。団地創立のときに植えられた七十歳近い樹が、黒ずんだ幹の上に咲いた花を落とされているが、動くことなく心静かに耐えている。古木は覚えているはずだ。日本最初の公団住宅は昭和三十一年、水洗トイレやキッチン、ベランダ、白黒テレビや電話のある暮らし、高度成長期にはそのモダンさから憧れの団地住まいだった日々を。応募資格に月二万五〇〇円以上、国家公務員の初任給が八七〇〇円の時代である。抽選会には行列をなしていたという。ニンゲンの年寄



常盤平団地の亡き友人の部屋

りもその辺はよく覚えていて、昔は、と語り、今の凋落ぶりを嘆く。わたしはそんな時代は知らない。

わたしが住んだ最初の団地は、千葉県松戸の常盤平団地ときわだいらだった。昭和三十五年築、五一万坪の土地が造成され、一七〇棟の四階建てが常盤平駅近くから隣の五香駅にかけて桜並木とともに立ち並ぶ。エレベーターがないので足の悪い年寄りは駅に近い一階か二階に住み、駅から遠い緑深い棟には、ネパール人、インドネシア人、中国人、フィリピン人などが1DKに何人も住み、早朝から都心に働きに出ていた。かつて二万人が住んでいたマンモス団地であったが激減し、二〇〇四年には五三九五世帯、うち一六四一戸が1DK、ここに独身者ひとりが住み、高齢者が六〇〇人、二〇〇四年当時ですら四人に一人が高齢者となっていた。

ネット界限ではトシヨリ、ガイコク人、困窮者の住む掃き溜め、ゴミ団地などと書かれていた。たまりかねて抗議文を書いたが、ネット民たちはまるでわかっていないのだ。自分たちがいつここに流れて来るかもしれないことを。老いたら部屋は借りられない。わたしは不動産屋の前で、部屋を貸してくれないのかと泣きじゃくり叫んでいる老婆をみたことがある。保証人がいなくても保証会社があるじゃないかという人があるが、その保証会社が年寄りを嫌がる。大家さんにしてみれば、屋内でたとえ老衰であれ

死なれては、その部屋は事故物件になってしまい、大島てるのサイト事故物件マップに載せられてしまう。公団住宅なら保証人はいらないうし、年齢も問わない。

常盤平団地では二〇〇一年春、桜の咲く頃、五十九歳の男が死後三年の白骨死体でみつかった。翌年の春にも五十七歳の男が炬燵につつぶしたまま、亡くなっていた。カラのカップラーメンが転がっていた。二〇〇三年の千葉県内の孤独死は七六三名、松戸市内の五十歳以上の孤独死は九〇件、常盤平団地は日本で先駆けて孤独死対策に取り組み、テレビでも報道されていた。わたしが引越してきたのはその頃だ。テレビの影響で、わたしが隣町で盆踊りがあつたので踊りに行き、常盤平団地から来たというのと、「かわいそうにねえ。あんなとこに住んで、ここにある鳥の串、好きなだけお食べ」と言われた。

団地には当たり屋さん（車に当たって稼ぐ）もいたし、呑んべえもいた。偶数月の半ばには威勢よく船橋競馬に通い、オケラ街道をそぞろ歩きする。古里の土佐に似ていた。隣のじいさんは大工だったが転落し足を悪くして働けず、生活保護になっていた。女房亡きあと、安酒とゴミの臭いが廊下まで漏れていた。食費が足りなくなり市役所に前借りに来るので、食費は残すようにと民生委員に言われ、「おらあ、保護費支給日にカップヌードル三〇個買っ

てみせてやった、これで文句はねえだろ」

朝の七時、壁伝いにじいさんはやってきて、震える手を合わせて、わたしに頼み込む。「すまねえ、キレちゃった。おら足が痛くてよお、代わりに大五郎を買ってきてくれ」

この人のおかげで、わたしは甲類焼酎の銘柄をずいぶん覚えた。

この団地には「流れてきた」人達がいた。もともととは三味線の師匠をしていて家もあつたが、認知症になったあと、宗教団体に全財産をとられ、引越してきていた老婦人。親亡きあと財産を親戚に持ち去られ、こちらに移って来ていた心の病の女性。「あの人はお嬢さんで、ここに住むような人じゃないよ」と近所の人が言っていた。わたしに何ができたろう。ただ知って、救急車の灯のように俯いてやり過ごした。

餓死した人がいたと聞いた時は、腹立たしかっ



民生委員の腕章

た。話してくれた住人に、何で知らせてくれなかったんや、と関西弁できつく言ってしまった。「それが誰にもいいうなと言われて、食べ物がないから、わしが毎日、少しずつ運んどった。けどわしが入院して、戻ってきたら、あいつは冷とうなっていた」「知らせてくれなきゃ、どうしようもないんや」「でも、まさか入院しとる間に、死ぬ、死ぬなんて」

中年の男性は、すすり泣き始めた。工員服の袖で涙をぬぐっていた。この人はただ打ち明けたかったのだ。誰かに聞いてほしかった。あの時、わしがあの人を責めたのは間違いだった。運命だったとか、あなたのせいじゃないとか慰めるべきだったのだ。十八年経った今頃悔いている。他人の心に理解のないまま、民生委員を三年間続けて、同じ団地の人の餓死にも気付かず、しかも最初に心をよぎったのは自分の担当地区じゃないという安堵感だった。知らせてくれなきゃ、のわたしの声は自己保身ではなかったか。わたしがすべきだったのは、一緒に泣いて、もっと話を聞き、名もない人に花を手向けてあげることだったのに。

事故物件ゼロ対策として、国は見守りボランティアを推進していたが、現場には無理があった。見回り担当者はドアを叩き、風呂場や梁にぶら下がるご遺体を発見する。畳一面にたれる肉汁や、ドアの開かないほどのゴミ屋敷に人

間のくぼみが出来て、黒いハエが群れるのは、プロでなくてはたんたんとしていられるものではない。

見守りされていた人が声をかけてくれてありがとうとお礼を言いに来て、翌日、江戸川に飛び込んでしまい、気づけなかったと自分を責めていた民生委員もいた。彼女は気を病み、「ここを出るのよ」とわたしに言い、山陽地方に引越していった。

見守り活動のせいで孤独死が減ったのは事実だ。二〇〇七年六月三日付産経新聞の記事には、「孤独死が3割減」の見出しが躍る。前年の松戸市の孤独死の死者数が二〇〇五年の一〇二人から三〇人減の七二人になったとある。論文にもされ、フランスの雑誌にも掲載記事となり、常盤平団地の孤独死対策は理想的な国のモデルケースとされた。けれどその裏で、支えるボランティアの疲弊を伝えた記事はない。

北九州市は、オニギリ事件の後(二〇〇六年五月門司の団地で五十代男性が餓死。二〇〇七年七月小倉の五二歳の男性が「オニギリ食いたい」と書き残して餓死)、常盤平団地の会長を講演に呼んだ。北九州市は門司の事件のときに法的に適切処置だったと主張していたが、オニギリ事件で福祉事務所が告発され、市民のデモもあり、何かしら手を打たなかったのだろう。だが、わたしは北九州市市役所が常盤平団地のボランティアによる孤独死対策を熱心に傾

聴したと聞いた時に、不安を覚えた。ボランティアは福祉の切り札じゃない。ボランティアを美化する陰で、県も市も国も責任を逃れようとしているのではないか。北九州市の餓死を防ぐのは、市民の見守り活動ではなく、住む場所やあたたかいご飯、食べられるための貧困対策ではないのか。

千葉県松戸市の民生委員大会のおり、会場に張りつめた空気が流れた。「伏魔殿」（我々民生委員はお役所の上層部をそう呼んでいた）が、講演で〇〇パーセントまで生活保護の受給率を下げよと言ったからだ。会場を出たセンパイたちは口々に、私らの役目は困窮者に生活保護を取らせるのであって、カットさせるのではないと憤っていた。誰かが、困っているもんを数字で切れるかと、吐き捨てるように言った。

メディアから「ヤミの北九州方式」と呼ばれた生活保護受給者抑制に尽力した元北九州市市長は、その政策が評価されて引退後は、内閣官房参与に出世した。

常盤平住まいから一八年、わたしは今、六十七歳となり関西の「事故物件」団地を一年ごとに住み替えている。団地の事故物件は一年間だけ半額になるからだ。日本では部屋での孤独死は年間八万人を超える。このうちのたった一部屋がわたしの生命線である部屋代を割りき支えてくれて

いる。わたしもいつか必ずやこの八万人の一人となり、どなたかに恩返しする。

今春も引越すが、団地の契約時に渡される「重要事項説明書」には、その他の事項の所にひっそりとう記されていた。「令和六年六月十八日、住戸内で事故歴あり（詳細不明）特殊清掃あり」この文面でわたしには想像がつく。

部屋主の女性は桜の季節かその前に亡くなった。ご遺体は古びて、死因が内因か外因か判定できない。事件性がないとされ解剖はされない。遺体の検視官は万年人手不足であり、一体あたりの解剖の費用も高価である。犬神家の一族のような方が死因不明ならば警察官も張り切るが、六畳一間で転がっている老人には刑事も関心をもたない。困窮による餓死も「不詳」にされる。

団地の仮予約の時に、大阪の事故物件団地の一覧表を見せて貰った。ペラペラとした白い用紙にまとめられた一覧表には、年齢や男女別とともに、短く「不詳」とあった。「自殺」や「病死」など死因があるものはわずか数件、不詳、不詳とそのページの三十件あまりが埋まっていた。貸主には、ご遺体の場所の告知義務があるため、「和室の中です」と担当者から囁くような声で言われた。

囁き声がもう一度聴こえた。「不詳ですけど、かまいませんか」「ええ、お願いします」か細く答えた。

ありがとうございます。選考委員の先生方、編集の皆様、心から御礼申し上げます。

常盤平団地の仲間たち、きつと天国で賑やかに喜んでくれていると思います。洗濯物の干し方まで注意するおせっかいで人情味あふれる団地。老朽化で建て替えになるけれど、建物が立派になれば家賃が高くなり、もう手の届かない町となります。さよなら、たくさんの良き想い出がありがとう、常盤平団地。

優秀賞 受賞の言葉

山田まさ子



山田まさ子

やまだ まさこ

1957年生まれ

高知県土佐育ち

1994 法政大学 通信

教育部卒

大阪文学学校修了生

高知県芸術祭文芸賞

大原富枝文学賞

第6回法政大学懸賞論文賞『法政』1994年2月号掲載

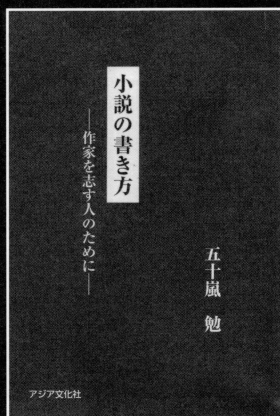
第12回JTB旅行記賞佳作『旅』2004年1月号掲載



小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方

——作家を志す人のために——



五十嵐 勉

I 創作・技術編

・小説の形

・素材の見つけ方・選び方

・動機について

・主題の捉え方

・題名の付け方

・取材・調査

・ストーリーの組み立て

……等々

II 応募・発表編